

明治二十七年十月九日紀事

2749



414
22



明治廿七年十一月九日午台二時早稻田

大隈伯ヲ訪テ新著新詩史一部ヲ贈與ス

誠一曰ク此新詩史ハ拙生維新以來我米澤藩及
予一身ニ關係アルノ諸友人ヲ標題トシテ一詩
ヲ賦シ題字ハ伊藤總理跋詩ハ清國前公使李經
方ナリ予ガ戊辰國難中尤モ艱難ノ事ハ奥羽諸
藩ノ總代トシテ建白上京ノ節道路梗塞横濱ニ
潜伏致シ遂ニ朝廷御用ノ為貴兄ト小松帶刀君
ノ御雇入ノ外國英船アルビヨシ号ニ潜乗出帆然
ルニ七月廿九日遠洲灘ニ於テ颶風ニ會シ已ニ

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

養吉堂

難船ニ及ハントス當時ノ事ヲ回想スレバ今尚
滿身戰慄ス仍而小松及貴兄ニ對シタル拙作アリ

潜伏靈船纔免身風濤險惡幾艱幸皇天不與
使君便遠海同為魚腹人

當時ノ危難御記憶アルヤ否

大隈曰ク遠洲灘ノ難儀ハ今猶忘レ難シ風濤險
惡ナレト幸ニ暗礁ニ觸レズ覆溺ヲ免ル所以然
ノ者ハ陸地ヨリ吹来ルアラシニテ沖へ流シタ
ルガ為ナリ舟モ格外大キクナシ覆溺ノ禍ヲ免

レタルハ實ニ天幸ナリ其時相識リシナラバ御
都合ニモ相成候事アラシ小松ハ寛容ノ人ニテ
性質頗ブル灑落薩摩ニハ珍レキ出来タル人ナ
リ縱令船中如何ナル形况アリトモ決而無體ナ
ル事ハ小松ハ為サヌナリ其年十月小松病死ス
自分ハ長崎ニ居リ小松ノ危篤ヲ聞テ歸リシ時
ハ已ニ絶命然ルニ小松ノ遺言ニテ外國副知事
ヲ命ゼラレ直ニ小松ノ跡役ニ相成タリ自分ハ
小松ノ推舉トハ不知ナリ遠洲灘ノ難船ニテ思
ヒ出タリ丁卯ノ歲神保修理副島次郎等同船土

佐ニ赴キシ節非常ノアラシニ出逢タリ此時ハ
日本人斗リニテ乘リ出シ實ニ非常ノ困難ヲ極
メシ事アリ

借日清ノ事モ遂ニ大破裂セリ前年李経方此邸
ニ兩三度来リシニ自分ハ餘程李鴻章ニ忠告傳
言シタリ今日屬邦等ノ論議ニテ朝鮮ノ處ハ定
ルモノニ非ズ到底我政府ニ抵觸スルナリト申
聞ケシニ如何ニモ左様ナリト申居レリ
目下朝鮮ヲ治ムルニハ第一着手ニ日本ヨリ銀
行ヲ京城ニ立テ國王ノ命ヲ以テ日本ヨリ一千

萬圓モ公債ヲ借シ夫レニハ相當ノ海港ヲ抵當
ニ取り第一ニ鉄道生産等ノ業ヲ起シ鉄道ハ釜
山ヨリ京城ニ到リ續テ平壤義州ニテ一方ハ釜
山ヨリ元山ヲカケテ咸鏡道ヲ通シ露西亞境マ
デ着手候得バ他日サイベリヤ鉄道ノ成功ニ及ンテ
朝鮮ヨリ我山陽東海鉄道ニ聯絡シテ世界ノ公
道ト致度左候得バ其収入モ少カラザルベシ是
ハ實ニ予ノ希望ナリ且貸付餘金モ兵備生産ノ
外ニハ決シテ浪費セシメズ日本ヨリ之ヲ監督
ス可シ若シ疑惑故障ヲ生ゼバ大隱君國王トモ

ニ揮除キ義和宮ヲ立テ日本ヨリ一切ヲ涉シテ
日清平和ノ頃ニハ何處ヨリモ着手不相成様處
分致置度愚存ナリ

目下攻戰中今ノ内ニ滿州ヲ略取ス可シ他日平
和ニ歸シ候節ハ滿州地方ハ連モ日本ノ手ニテ
治ムルノ難事ナリ如何トナレバ日本ノ面積ニ
万方里ナリ盛京黑龍江吉林ノ東三省ハ面積六
萬方里ナリ況ヤ一方ハ支那ニ接シ一方ハ露西
亞ナリ彼露國人豈晏然トシテ日本ノ領分視ス
ルヲ許スモナランヤ去レバ勞シテ功無シ地所ハ或

ハ台灣ニトメテ償金ヲ取ルヲ要ス償金モ澤
山ハ取レザルナリ三億萬ヲ限ルベシ一時ニ三
千萬ヲ出サシメ餘八十ヶ年賦ニ取ル可シ其半
ハ軍費ニ供シ其半ハ軍艦鐵道ニ供ス可シ此度
運送船ノ噸數ハ十三萬噸ニ相成ル猶軍艦四艘
智利ヨリ購求スルヨシ内一艘ハ甲鉄ナリ其價
ハ一千萬圓ナリト聞

此度廣島臨時議會ニテ秘密會ヲ開キ海陸兵十
四萬人ノ出兵ヲ承諾スルヨシ今回臨時議會ニ
テ要求スル軍資費額ハ一億五千萬ノ内國債ヲ

募集スルナリ此度ノ軍事ニハ左程不用ナラン
唯此機ニ鉄道軍艦等ヲ購求ノ支度ニ消費シ猶
三千萬圓モ餘ル可シ此固ハ一億五千萬ハ東洋
文明ノ廣告料ナリ攻_レ國此度初テ亞細亞洲
ニ独立ノ強國日本アルヲ知ル世界中大手ヲ振
リテイバラルナリ

先年英佛混合北京ヲ攻ムル時ハ二萬ノ兵ニテ
攻撃シテ償金八百萬テールヲ取ル其時ハ露國ヨ
リ有名ノ
カ仲裁ニ立入り其結果ヲ為ス
此度日清ノ間ニ英國ヨリ諸強國ニ仲裁セン

ヲ試ム佛國之ヲ存ケ独逸之ヲ存ケ露國之ヲ存
ケ米國亦之ヲ存ク伊太利独リ英國ニ左担スル
而已日本文明ノ勢力ハ實ニ世界ヲ壓倒セルナ
リ

今朝鮮ニ一千万圓ヲ利用シテ鐵道ヲ布設スル
其主宰ニ之ニ波澤ハ老倦スレモ止ムナキ時ハ
則テ之ヲ起ス可シ銀行ハ則チ川田ヲ以テ主宰
セシムルヲ可トス

今郵船會社長吉川ト日本銀行總裁川田ト實ニ
必要無二ノ器械ナリ唯兩人トモ身體健全ヲ欠

クヲ如何セン

凡ソ人ハ運命ナリ人ハ冒險ニアラサレバ奇功ヲ奏シ難シ岩崎杯ハ実ニ非常ノ運命ニ遭遇セリ七年ノ臺灣十年ノ西南役是ナリ五代ハ決而岩崎ニ方ル才器ニ非ス之ニ加フル・藩閥ヲ以テ根拠トス然リ而レテ遂ニ失敗スルハ運命拙キユヘナリ今榎本大島ハ曾テ大刑ニ當ル可キ人ニシテ今日ノ政府ニ立ツ陸奥ハ獄ヨリ出テ外務ノ主宰トナリ今日ノ大功ヲ建ツ條約改正運命ナケレバ猶貴藩ノ雲井我カ江藤ノ如シ而シテ人

事ノ変遷ハ実ニ非常ニシテ如此ノ世態ハ実ニ空前絶後ナリ猶此後二十年ヲ経過スルモ決シテ難事ニアラザルベシ

朝鮮駐在ノ井上ヨリ伊藤ニ申来リ朝鮮鉄道ハ自分ニ委任セラレ度自分一手ニテ處辨致シ度旨ナリ伊藤之ヲ危ニ未ダ許容セズ
堵今回征清ノ件伊藤志何レノ邊ヲ進極トシ何レノ處ニ終局スベキハ実ニ配慮ノ様子ナリ
此度五百萬テール位ノ外債ヲ起スハ經濟上妙策ナリ而シテ其金ハ先方ニ置クヲ可トス唯我邦

ニテ夫レ丈ケノ通札ヲ造ルヲ可トス外債モ低
利三分位ナラバ誠ニ可惜モノナリ廣島ニテ外
債ヲ起ス論題ヲ對シ松方ハ同意ニ見ヘザルヨ
シ外債可不可ノ論ニ宗旨ノ如シ

驛通上ノ事モ誠ニ怪我ノ功名ニテ内國運送會
社ハ三菱ニ凌駕セラレ臺灣役ノ後中間ニ故障
ヲ生シ共同運輸會社創立セリ共同三菱軋轢シ
テ更ニ郵船會社ト為ル今日此會社アリテ始而
目下運輸ノ大業ヲ負擔セラレナリ此大役ノ
後ハイヤテモ才ニ毛航海ノ業ハ獎勵擴張シテ欧州

マデモ航海セザル可カラザルノ時機ヲ到来シ
テ不止ナリ

朝鮮人口ハ一千二三百萬モ有ル可シ之ヲ露國
ニ附與セバ日本ハ不立ナリ將來ハ清國ヲ誘導
シテ共ニ協カスベキナリ

今回日清ノ一役ハ東洋政治上意見ノ衝突トス
但シ牙山豊島ノ戰ハ我國古習ノ暗殺法ニテ將
未欧州ノ本舞臺ニハ禁断ナリ隨分捕虜ヲモ斬
殺セシヨシ他日文明國ノ指彈ヲ慚ルナリ

以上ハ大隈伯平日ノ問答ナリ我應答ハ略シ

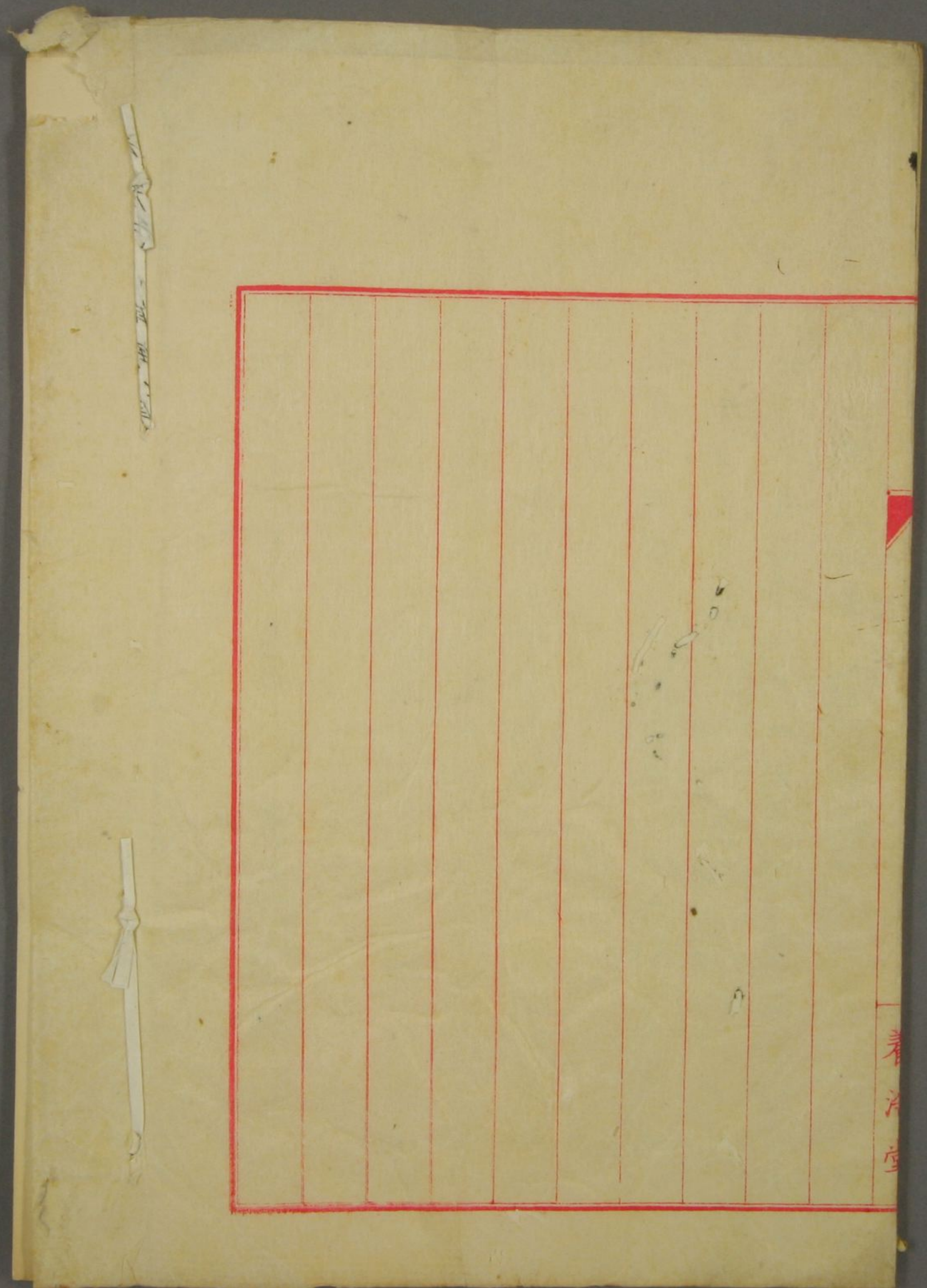
テ大隈ノ發言ヲ畧記シ之ヲ匣底藏シ他日ノ
紀念ト為ス猶二十二年大隈ノ遭難後翌年五
月頃園遊會ニ被招伯ガ健全ヲ祝セシ事アリ
而末五年振リテ緩談セリ此又時會ノ到来ス
ル者歟

因記ス明治五年中井弘左院ヨリ歐洲視察ノ
為メ出張ノ節函國中村樓ニ於テ別宴ヲ開ク
其席同年者ハ後藤山縣大隈及僕ナリ皆天保
九年戊戌ノ生ナリ

明治二十七年十月

宮島誠一郎





春
清
堂